

国際理解の視点に立った 東アジア交流史の社会科教材開発

科学研究費基盤研究(C) 2012年4月-2015年3月



ホーム
Home

研究概要と組織
Outline

研究メンバー
Member

活動報告
Report

ご挨拶

現在の世界は、グローバル化とリージョナル化が同時に進行しています。学校教育を通じて社会についての見方や考え方を育成する社会科教育においては、このような刻々と移り変わる世界の変化に対応するだけでなく、主体的に国際社会で活躍する人材を育成することが求められています。その意味で、本研究は、国際理解の視点を踏まえて、中学校社会科教育における東アジア(日本・韓国・中国)交流史の教材を開発することを目的としています。特に国家史や政治史・経済史とは異なる、人々の交流を中心とする歴史教材を通して、将来の東アジア地域の平和構築に資する社会科を目指しています。

この研究の大きな特徴は、参加しているメンバーの多様さにあると言えます。長年にわたって日中韓をはじめ東アジアの社会科研究および教材の作成に携わり、研究や実践の様々な分野で大活躍してきた二谷先生。二谷先生は、私たち研究会のご意見番役でもあります。東アジアにたくさんの友人を持ち、日本全国はもちろん韓国や中国などを食べ歩きながら楽しく研究を進めている梅野先生。福岡の中学教師から直接韓国に飛び込んだ後、近年は東アジアにおける人の交流史に着目してその教材化に励んでいる國分先生。社会科・地理教育の専門家として北海道で教鞭をとりながら、済州島の在日コリアンなどにも興味を持ち、国際理解教育や多文化共生社会の実現に取り組んでいる金先生。中国の朝鮮族として、日本で勉強を終え、現在は広島県の県立高校で国際理解教育を軸に教鞭をとりながら、日中韓の社会科教育について比較研究をしている蔡先生。そして私、高は山形の大学に勤務し、農村外国人配偶者や中国帰国者の生活をキーワードとして比較研究をしながら、「地域の中の東アジア」を探究し続けています。

この科研は、日本社会科教育学会第61回大会(2011)における課題研究Ⅰ「どのような子どもを社会科で育てるのかー東アジアからの視点ー」のメンバーを核として、それを発展させる形で始まりました。みんな本当に楽しくて、まじめで、明るい方々です。この集まりにこそ、すでに「東アジア」が存在しています。このメンバーが自分の専門分野を基に、東アジア交流史の社会科授業を様々な角度から構想します。

研究代表 高 吉嬉 KO Kilhee
山形大学地域教育文化学部